

長 浜 城 跡

▲
駿河湾の海之城と海賊
— 葦山外張先之城二候 —

次第



開催日時 令和 7 年 8 月 30 日（土）11：00 ～ 16：20

開催場所 沼津市立図書館視聴覚ホール

- 10：30 開 場
- 11：00 開 演
- 11：05 ～ 11：55 報 告 木村 聡 「伊豆長浜城跡研究の現在地」
- 11：55 ～ 13：10 昼休憩
- 13：10 ～ 14：10 講演 1 池谷 初恵 氏 「小田原北条氏における伊豆・韮山」
- 14：10 ～ 14：20 休 憩
- 14：20 ～ 15：20 講演 2 田中 謙 氏 「日本最大の海賊 村上海賊」
- 15：20 ～ 15：40 休 憩
- 15：40 ～ 16：20 トークイベント
- 16：30 終 了

目次



- 伊豆長浜城跡研究の現在地（木村 聡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 小田原北条氏における伊豆・韮山（池谷 初恵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 日本最大の海賊 村上海賊（田中 謙）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

伊豆長浜城跡研究の現在地

沼津市教育委員会

木村 聡

はじめに

伊豆長浜城：沼津市内浦長浜・重須（おもす）に所在する北条氏の水軍の根拠地。

昭和63年（1988）5月13日指定 指定面積：15,476.23m² 復元整備工事等を経て、史跡公園として平成27年（2015）5月に開園。

→これまで考古学だけではなく、歴史学・民俗学なども交えた総合的な調査が実施されその成果は平成28年（2016）3月に『国史跡長浜城跡整備事業報告書』としてまとめられた。

報告書の刊行によって長浜城跡そのものにかかわる調査研究は10年前にひと段落を迎えたが、これら調査成果が研究者や他の自治体から参照されることによって、新たな研究もおこなわれている。

I 長浜城跡の概要

(1) 西浦地区から内浦地区へ

現在の内浦地区は、東から重寺（しげでら）、小海（こうみ）、三津（みと）、長浜（ながはま）、重須（おもす）からなる地域であるが、この区分に至るまでに何回かの区分変更が生じている。

○鎌倉時代

「皇嘉門院惣処分状」（治承4年（1180）（『市史』133））に「三津御厨」の記載

→御厨：魚介などを供物として調進する所領。三津御厨も豊富な海産物を年貢として納入していたと考えられる（沼津市史の解説より）

○室町時代

「管領斯波義将奉書」（応永3年（1396）（『市史』170））「三津庄内重須郷半分・河見・木負」

→長浜周辺も三津庄の一部。三津庄は伊豆守護上杉氏の所領。

○戦国時代

「伊豆国西浦庄内 三津郷、長浜郷、おもす郷、木正郷、くすら郷、しけてら郷、ひら沢郷以上七ヶ所」（天正18年（1590）「豊臣秀吉印判状」（『市史』741）

→概ね北伊豆東半が西浦、西半（立保・古宇・足保・久料・江梨）は江梨5か村

○江戸時代

「西浦七郷」に現在の内浦地区に属する小海と現在の西浦地区に属する河内を加えた「内浦九ヶ村」が成立。その後「内浦九ヶ村」は、慶長年間には現西浦地区の西に位置する井田までを含み、「内浦十四村」となったが、明治9年に分割され、現在の区分と同じ「内浦村」となった。

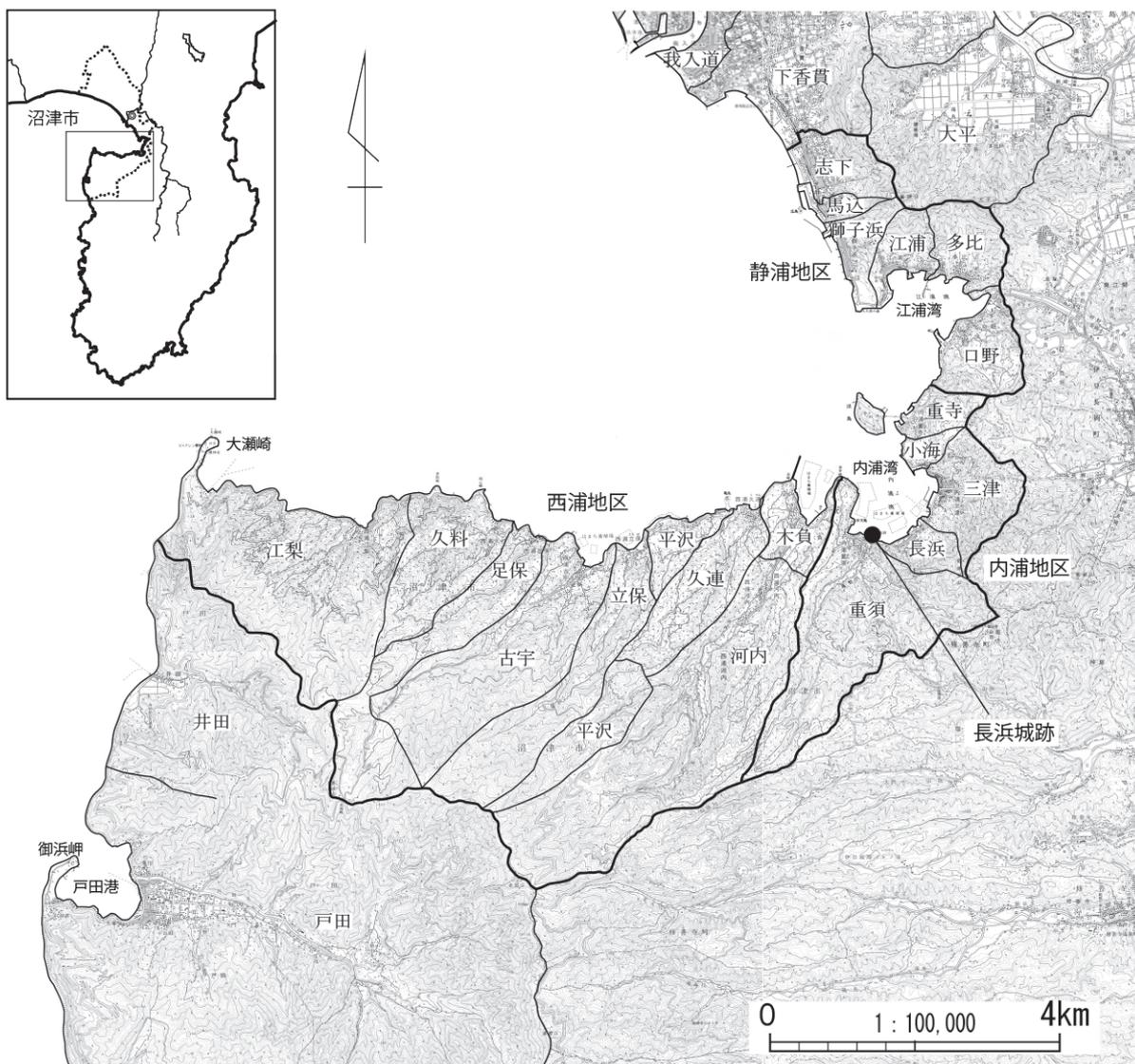


図1 史跡長浜城跡の位置と三浦地区地域区分図

(2) 豊かな漁場であった内浦湾

【静岡県水産誌（明治27年（1894）発行）】

風の条件はあれども内浦湾は

- ・「魚族ノ来集最モ適セリ」
- ・「さが風（10月より1月頃ニ多シ真北ヨリ吹ク）ハ魚族ニ最モ好適セルモノ、如ク此風吹去ル後ハ各種の魚族群来シテ各小区共ニ多獲ヲ占ムルト云フ」

→長浜と重寺は特に漁業従事者が多かった。

表1 静岡県水産誌（明治27年）掲載の内浦の生業（巻4_28頁より一部字体を改め転載）

村名	項目 字名	戸数	人口	漁業	漁者数	業務の歩合			漁業者1ヶ年1人の収入	
						漁業	商業	農業	平均	最多漁者
内 浦 村	重須	58	443	36	36	3分	—	7分	15円	30円
	長浜	43	354	38	64	7分	5厘	2分5厘	40円	50円
	三津	147	869	22	34	1分	5分	4分	35円	45円
	小海	33	254	28	52	5分	2分	3分	35円	45円
	重寺	73	474	68	99	9分	1分	—	30円	50円

(3) 長浜城跡の特徴

内浦長浜・重須にまたがる城山と呼ばれる海に突き出す岬の上に築城。

- ・土塁を持つ4つの主要な曲輪（第一曲輪～第四曲輪）と小規模な曲輪群からなる。これらは北東―南西―南東とL字状に配置されている。
- ・標高34mの最高所に主郭と考えられる第一曲輪があり、以下南東に向かって第二曲輪、第三曲輪、第四曲輪と続く。
- ・曲輪間には堀切が設けられ、第一曲輪の北西―南―南東側、第二・三・四曲輪の南西―南東側にかけては比較的規模の大きな土塁が巡る。一方、海側は土塁がなく、開放的な造り。
- ・横矢がかかる技巧的な虎口（出入口）を備えている。

北条氏の認識：天正17年（1589）：（長浜城は）「葦山外張先之城」（『戦北』3430）

※外張：外側の防衛線。葦山城を守る最前線の城の意

最も緊張下に置かれたのが、天正7年（1579）から始まる北条氏と武田氏との争いである第2次甲相合戦（海上での戦いを「駿河湾海戦」と称す）時とされる。

【文献に登場する長浜城と駿河湾海戦】

<天正7年>

9月3日：武田氏が三枚橋城（沼津市大手町）築城。緊張が高まる。

11月7日：「豆州浦為備、長浜二船掛庭普請」（『戦北2110』）

11月17日：梶原景宗に「西浦番銭」の未納分を徴収するよう命じる（『戦北2115』）。

※梶原：梶原景宗。紀伊国出身で北条氏に雇われた水軍の将。里見氏との戦いで活躍し、その功績から伊豆の海上備えの役割も果たす。

→海上での戦いに向けた臨時的な税金を徴収が行われる。

12月19日：「長浜二梶原就被為置」（植松文書『戦北2121』）

<天正8年>

3月15日：駿河湾沖での海戦（『武徳編年集成』・『北条五代記』）

北条方：梶原景宗、梶原兵部（景宗の息子）、清水、富永、山角、松下、山本
⇒筆頭は傭兵の梶原。清水以下は伊豆衆や西浦の代官。

武田方：小浜景隆、向井政綱、伊丹康直、小野田筑後守（武田水軍の四海賊）

⇒小浜、向井は伊勢から招かれた水軍大将。伊丹は今川氏の海賊奉行

○駿河湾での海戦は、傭兵VS傭兵が中心

4月25日：武田勝頼、向井と小浜宛て、梶原撃破に対し感状（『戦武3331・3332』）。

6月23日：梶原の戦功を賞し大船建造。北条氏より乗手を仕立てる命令（『戦北2179』）。

<天正9年>

4月7日：武田四海賊が久竜津（沼津市久料）襲撃、梶原撃破（『戦武3534・3536』）。

6月3日：北条氏光が植松氏に獅子浜での新船造船を増すよう命じる（『戦北2239』）。

6月29日：武田勝頼、子浦（賀茂郡）での戦功を賞する（『戦武3372』）。

8月20日：「去大風雨ニ、敵船為始安宅悉破損」（『戦武3601』）

梶原所有の安宅船が破損。海賊行為（戦闘行為？）ができなくなる。

⇒武田氏の史料だけをみれば、天正8年までは互角、9年からはやや武田氏が有利？

表2 駿東・伊豆における戦国期の主な出来事

年号	西暦	北条氏に関わる主な出来事	今川氏・武田氏に関わる主な出来事
長享元年	一四八七	伊勢宗瑞 今川家での功績が認められ、興国寺城とその周りの領地を与えられる（北条早雲の旗揚げ）	
明応二年	一四九三	伊勢宗瑞 堀越御所を襲撃（伊豆討ち入り）	
明応四年	一四九五	伊勢宗瑞 本拠を韮山城に移して伊豆国主の地位を獲得	
永正十五年	一五一八	虎の印判状初出	
天文六年	一五三七		今川義元 武田信虎の娘を正室に ⇒駿甲（駿河と甲府）同盟 北条氏と武田氏の対立
天文九年	一五四〇		
天文十二年	一五四三	長浜において検地（長浜野帳）	
天文十八年	一五四九		今川氏による興国寺城築城
天文二十年	一五五一	武田・今川・北条の三者間の同盟	
永禄三年	一五六〇		
永禄十一年	一五六八	今川氏と武田氏と緊張関係 北条氏政が興国寺城を確保	
永禄十二年	一五六九	今川氏真 北条氏直に駿河国を譲る 北条氏康 蒲原・興国寺・三枚橋・戸倉・獅子浜・泉頭・長久保に兵を配置	桶狭間の戦い（今川義元討死） ⇒駿河地域の均衡が崩れる
元亀元年	一五七〇		武田 韮山・興国寺城に攻撃
元亀二年	一五七一	北条氏康（反武田姿勢）から氏政（親武田）へ	甲相同盟
元亀四年	一五七三		武田信玄死去
天正五年	一五七五		長篠の戦い
天正七年	一五七九	木負の百姓に船着場の整備を命じる 長浜城築城か？	
天正八年	一五八〇	氏政が伊豆へ出陣 徳川も武田に対し攻勢となる	
天正十年	一五八二	駿河は徳川の領土へ ⇒北条氏は駿河国から後退	
天正十七年	一五八九	豊臣秀吉 北条氏直に宣戦布告	甲相同盟破棄 武田氏 三枚橋城を築城
天正十八年	一五九〇	豊臣軍 山中城、韮山城を攻める 北条氏直 小田原城にて降伏	武田氏滅ぶ



図4 第二次甲相合戦時の城郭配置図

2 長浜城跡にかかわる研究史

(1) 指定時の評価

昭和 62 年 7 月 国史跡指定に向けた申請書

「・・・残存する文献資料から当城跡が後北条氏の水軍の基地である重須湊を守るための城郭であり、天正 7 年（1579）から天正 18 年（1590）まで存続したことが明らかになった。（中略）長浜城はその存続期間が戦国時代末期の短期間に限定できること、当初から水軍の基地として築造されていること、（中略）戦国時代末期の城郭として価値は非常に高いものがある。」

→この評価は確かに正しい。が・・・

(2) 整備に向けた総合調査

平成 10 年度（1998）から本格的な発掘調査を開始。

- ・ 15 世紀後半から 16 世紀前半の遺物が一定量出土し、数量で比較すれば、第 2 次甲相合戦の時期（16 世紀後半）よりも 15 世紀後半の遺物の方が多い。
- ・ 技巧的な造りになっている第二曲輪の虎口（出入口）は、16 世紀前半では堀だったことが判明。

→築造は 15 世紀後半以降で、16 世紀後半に改修されて現在の城の形になったことが明らかになった（船着場の新設だけではない）。

○武田氏に備えて築城されたという史跡指定時の評価の一部は覆ることに。むしろ戦国時代末期の軍事施設としての評価だけではなく、新たな視点として西浦の人々の地域経営のひとつの拠点として評価すべき。

○天正 7 年から 10 年というわずかな期間が例外であり、平時の長浜を考える必要がある。

【西浦在郷之御被官衆】

北伊豆の土豪は伊勢宗瑞（北条早雲）伊豆討ち入り前後から、宗瑞と関係を持っていた。

また北条五代記ではあるが、討ち入り時のエピソードに記載された伊豆の地侍衆 9 名のうち 6 名が海岸の土豪衆。「伊豆水軍の手引きがあったからだみてよいだろう」（永岡 2008）

→伊豆平定後、西浦は伊豆の経営を支える北条氏の直轄領として機能。最古の虎印印判状。

「御領所舟形中」との記載（天文 23 年（1554）北条氏朱印状『戦北 467』）。

「御領所舟形中」として「松下三郎左衛門、大川若狭、土屋左衛門太郎、相磯平二郎、大河四郎五郎」があげられている。

※松下は三津、大川は長浜、土屋は重須、相磯が木負、大河は三津の土豪。彼らの一部は検地なども行う代官としての役割も。

土豪が担った役割のひとつ

：「駿州御祝言之御用代物六百六拾七貫文、紙八駄、西浦より清水迄可相届」「西浦在郷之御被官衆自身、致上乘可罷越候」

→漁業・塩作りなどのほかに、伊豆と駿河とをつなぐ海の民としての役割。

→現在の漁師のイメージだけでは語れない多様な側面を有す（網野 1998 など）。

あるときは北条氏の被官衆であり、漁師・廻船業・水先案内人などなど・・・

		古瀬戸後期、大窯期瀬戸美濃製品	志戸呂製品／ 162,155は伊万里製品	貿易陶磁	かわらけ、羽釜(土師器)
	中世・十三世紀代				
I a	十五世紀後半代				
I b	十六世紀前半～中頃				
II	十六世紀後半～末				
III	近世・十七世紀以降				

図5 長浜城跡出土遺物の時期別、産地別編年表（沼津市教育委員会 2016 より転載）

○ 16 世紀前半から中ごろは、北条氏の領国のなかで、韮山城は「領国の繋ぎの城」として機能（池谷氏の資料参照）。西浦の人々は駿河と伊豆を繋ぐ実働部隊（本城の動きと連動）→長浜周辺の文書史料は多く、研究蓄積もある（池上編 2005 など）。今後は考古学の成果も含んだ総合的な評価を進める必要がある。

(3) 整備後に行われた調査研究（特に考古学の分野から）

2016 年以降、長浜城跡に関する個別研究は少ないが、2つのテーマで研究が進展

①本城である韮山城の総合調査が進展

→今後も調査が必要とするが、伊豆という地域を理解するための資料が増加。

→北条氏の最初の領国である伊豆を評価していく研究

②中世海賊研究の進展

→各地で海賊に関わる城郭の調査事例が増加。これまでの中世海賊研究の成果と合わさって、具体的な姿が見えるようになってきた。

→長浜城跡を特殊事例とするのではなく、日本史の中で相対的に位置づけるための研究

3 長浜城跡の今後の 10 年における

・調査研究の継続（≠城の発掘調査だけではなく、長浜という地域の総合的な研究）

→調査結果に基づく新たな価値を見出す

・城跡に残された豊かな環境を活用

→多様な生物、ジオスポットなど、中世の人たちも恩恵を受けていた豊かな環境を理解するための取り組み。

主な参考文献

網野善彦 1998『海民と日本社会』 新人物往来社

池上裕子編 2005『中世移行期の土豪と村落』 岩田書院

木村 聡 2023「史跡長浜城跡の整備 一海の城の整備とその活用一」『静岡県考古学研究』No.54
静岡県考古学会

静岡県漁業組合取締所編 1894『静岡県水産誌』（静岡県図書館協会 1984 復刻版）

永岡 治 2008『伊豆水軍』 静岡新聞社

沼津市史編さん委員会 1996『沼津市史 史料編 古代・中世』 沼津市（『市史』と略した）

沼津市教育委員会『沼津内浦の民俗』 沼津市文化財調査報告第9集

沼津市教育委員会 2016『国史跡長浜城跡整備事業報告書』

沼津市歴史民俗資料館編 2022『生魚、走ル！ ～沼津の海産物輸送と交易』

村上海賊魅力発信推進協議会編 2019『平成30年度日本遺産魅力発信推進事業 日本遺産村上海賊
調査研究成果報告書 中世日本の海賊と城』

渡辺尚志 2019『海に生きた百姓たち 海村の江戸時代』 草思社

※『戦国遺文 後北条氏編』（『戦北』と略した）『戦国遺文 武田氏編』（『戦武』と略した）

※ 紙幅の都合で参考文献の一部を割愛したことをお許しいただきたい。